魔法少女リリカルなのは　～最強の転生者？が降り立つ時～

Phantom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～最強の転生者？が降り立つ時～

【Ｎコード】
Ｎ５６７６Ｒ

【作者名】
Ｐｈａｎｔｏｍ

【あらすじ】
気が付くとそこは天界だった。一人の女神のうっかり（笑）によって死んでしまった俺「赤羽（あかば）　零夜（れいや）」。お詫びとして転生させてもらうことに…転生先は魔法少女リリカルなのはの世界。じゃ、張り切って行きますか。
※初投稿です。更新が遅くなると思いますがよろしくお願いします。
あと駄文です。

プロローグ（前書き）

どうもＰｈａｎｔｏｍです。
初投稿ですので広い目で見てやってください。

あらすじにもあるとおり主人公最強設定です。苦手に感じる、不快に感じると思う方はお帰りください。更新遅くなると思いますが、頑張っていきたいと思います。

プロローグ

アレ？…空が真っ赤だ…

ん？真っ赤なの…俺？

……はなんで俺こんなことに？

つっ！…頭痛ぇ、なんだ？…体も全然動かないし…、あ、やべ…そこで俺の意識は途切れた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ん……、ってあれ？なんだここ？」

気が付くと俺は知らない所に立っていた。頭を触ってみると血が出ていたはずの傷も治っている。

う～ん、さっきのことから推測するに俺って死んだよな。なんか色々と分けわかんないけど俺生きてる？

「それにしても、ここどこなんだ？」

回りを見渡すが草原がただ広がっているだけだ。

俺の家の近所にこんなところは無いしな～

参ったな、人探すにも広すぎてできそうにないし。

「どうするか」

腕を組んで考え込んでいると――――――

「どもども♪こんにちは～♪」
「うおっ！！？」
後ろから急に声を掛けられ後ずさる。そこには。
「そんなに驚くかな～？」
「いえ、普通は驚きますから」
二人の女性がいた。
俺に声を掛けてきた方は、綺麗な金髪で長さは腰にかかるくらい、服装は…あ～なんていうかゲームに出てくるような現実ではお目にかかれないようなものだな。
もう一人は、こちらも綺麗な黒髪で長さはショート、服装はＯＬが着るようなスーツだ。
「あ、あんたたち誰だよ？」
「ふぇ？この格好で分からない？」
金髪の人が言う。いや、分からん。
突然知らない所に居た上に、急に現れた奴らが誰かを推測する頭は俺には無い。ていうか、余裕がない。
「女神」
「は？」
「だから、め・が・み、だよ。わかったかな～？」
余計に分からなくなった。
――――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第一話　天界にて（前書き）

更新です。今回はタイトルどおり天界での話なので、なのはキャラクター出てきません。

あと短いです。ではどうぞ

第一話　天界にて

「め、女神？」
「うん、そうだよ♪」
笑顔で返す金髪の女性。
「ドッキリとかじゃ…？」
「違うよ～」
「信じられないかもしれませんが事実です」
二人にぴしゃりと言われてしまった。
いや、いきなり信じろって言われても…
「まあ、私の手違いで死んじゃったんだけどね～」
「……え？」
今すげえ重大なこと言わなかったか？金髪は笑いながら続ける
「だってさ～、コーラスウォーターが凄く飲みたくなってきちゃって…」
「普通、重要書類を扱っている時に飲まないと思います。しかもラッパ飲みで」
コップ使えよ。さらに頭を掻きながらまいった感じで金髪は言う
「いや～、三日ぐらい徹夜でやっててついついね♪」
「そのせいで死神担当の人が間違えて死なせちゃったんですよ！？」
え？話の流れだと俺ってジュースで死んだの？

死神担当なんてあるの？
てかこいつ等、人の生き死にについて語ってるんだが…まさか？

「あ、あんた達本当に女神…？」

すると、金髪の方がはあ～と呆れたようにため息を吐きながら言ってくる

「も～、さっきからそう言ってるよ～、なんでわかんないかな～」
「「あんたの（リニス様）の説明が少な過ぎるせいだ（です）」」
いきなり私女神ですと言われてそうなんですかと答える奴はそうそういないだろう。てかいないだろ普通

「それで？あんた達が女神だと言うのはなんとかわかった。でも…なんで俺はここにいるんだ？」

そう、今最大の疑問はそれだ
さっきの感覚っていうか記憶的には俺は完璧に血まみれだった（しかも頭）。死んでしまっていると考えられる

「それは先ほども言いましたようにこの方が原因です」
「ええと、その説明の前に名前とか教えてもらっても？」

なんて呼んでいいか分かんないし。

「はいはい♪私はリニスだよ～。あ、さん付けとかいらないからね、リニスでいいよ♪」
「申し遅れました。私はリニス様の秘書をやらせて頂いているニアと申します」

リニスはにこにこと笑いながら、ニアはぺこりとお辞儀をしてそれぞれ名乗った
リニスにニア……ってどこかで聞いた事あるような…。ま、まあ気のせいだろう、うん。

「あ、俺の名前は赤羽零夜。よろしく」
「なんか厨二っぽい名前だね」

それは言わないで欲しい。…話を進めるか

「じ、じゃあ自己紹介も済んだし、説明を……あー、やっぱりいいや」
「ふぇ？なんで？」
「いや…今更事情知っても意味なくないか？もう死んでるんだろ？」
「まあそだね」
ケラケラと笑いながらリニスは言う
て、このままだと俺天国か地獄に！？…うーん…ぶっちゃけこのまま死ぬのは嫌だな…よし、よくある転生というものを持ち掛けてみよう

「じゃあ、頼みたいことが「転生させてあげようか？」…い、いいの？」
「うん♪全然いいよ。ね、ニアちゃん？」
「ええ、赤羽さんが拒まないのなら問題無いです。もとはと言うとこちらに非がありますから」

……本当に転生って出来たのか…！

「ねーねー、転生先どこが良い～？」
「え？俺が決めるんじゃ？」

普通は被害者である俺の方に権利あるんじゃね？

「うーん、じゃあどこが良い？」

「へ？」

急に振られたから考えてなかったな。うーん改めて言われるとな～

「ふむ、あれなんかどうだ？」

「うん、なになに？」

こいつ知ってるかな？

「魔法少女リリカルなのはってやつなんだけど」

「うん知ってる知ってる。てゆーか全話観たよ♪」

ここ（天界）でもやってるんだ…

「じゃあいいか？」

「いいよ～じゃあ時期はどうする？」

時期……か。やっぱりA' s辺りかな

「じゃA' s始まる辺りでいくかな」

「ほいほい♪じゃあ能力は～？」

「あ、それは大まかにだが決めてあるんだよ」

おもいっきしチートだがな…

「――という能力なんだけど大丈夫か？」
「うん。大丈夫だよ♪」
「すごい反則的ですね…」

ニアが苦笑しながら言う。いやー、そりゃ貰えるなら強い能力のほうがいいからなー

「じゃあ、行きますか！」
「はーい！行っくよー！」
「お気をつけて」

俺の足元に魔方陣が現れる。
すると俺の足元からだんだんと消えていく

「じゃあな、色々とありがとよ」
「あ、いい忘れてたけど…」

ん、なんだろう？

「もしかしたら原作以外の敵が現れるかもしれないからね？」

なんだ、そんなことか…チートを手にした俺の敵ではないだろう
それに多少強くても力押しでいけるだろうしな

「ちなみに中には零君と同じようにチート使うような敵もいるからね～」

……え？

「ちょ！ちょっと待――――」

シュウ…

「いってら～♪」

手を振りながら陽気な声でリニスは言った

◆◆◆◆◆◆

「ギリギリでよく言えますね…あんなこと…」

苦笑しつつ言うニア

それを聞かずに転生先の世界を水晶から視るリニス

「はぁ…面白そうだな～」

「やめてくださいよ…あなたまで介入するなんてことは……はあ…」

「えへへ、ばれた？」

「ばれますよ。さてと…これから書類を片付けていただき――――」

バッ！

リニスは書類をニアの顔に突きつける

「ニアちゃん、これでいいかな？」
「こ、これは…！リニス様お、終わらせられてたんですか！？」
書類に目を通すニア
そこには確認済みの判子がびっしりとある

「これでいいよね？」
「ええと一応お聞きしますが…何がです？」
「転生だよ！！では行ってきまーーーーす！！」
「お、お待ちください！リニス様が居られないと困ります！！」

フッ

「あああああ！くぅ…に、逃げられた…！」

――――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第一話　天界にて（後書き）

自分が書いててなんですが、女神も一緒に転生ってありなんでしょうかw

次回はキャラクターたちと出会う話になると思います。

それではノシ

第二話　遭遇（前書き）

更新です

またも駄文で短いです

それではどうぞ♪

第二話　遭遇

海鳴市近辺　森林

「とっと…！」

ふう、無事に着地成功っと。キョロキョロと辺りを見回す。
お、無事に着いてるな、良かった良かった。

「さてと、まずは――――」

歩こうと右足を前に出す。
ズボッ！
あれ…なんか変な音が…ん？足が動かない？
足元を見ると見事に右足が地面に埋まっていた

「……ってなんで！？」

おかしいだろ！もう一方の足でバランスを取ろうとすると――――

ズボッ！

「……え、え～…」

呆れた声しか出せない
いやいやいや、さっき着地したときは大丈夫だっただろう！地面！

「くそ…これ抜けねぇかな…っと！」

ポンッ！
あ、抜けた
「……」
ま、まあよくわからんが転生の影響で力がセーブできなかった……
とか？
「あ、ということはパンチ力とかも上がってるよな？」
じゃ、試しに
そこら辺にあった木に向かって拳を振るう
木に拳が当たった瞬間――――――
ドオーーーーン！！
木は遥か彼方に…
おまけに風圧か何かなのか周りにあった木々も吹き飛んだ
「……よし」
加減の練習をしよう…
てかあの女神、力の調節くらいしといてくれよ…
俺はうな垂れながらそこを後にし、町の方向へと向かった
◆◆◆◆
同じく海鳴市近辺　森林
シュン！

「よいしょっと。ふうー……やっぱり転移は気分的に疲れるな～」

肩をコキコキと鳴らしながら言う

おっと零君探さなきゃ

え～と、ここにいる筈なんだけど…って明らかに来た跡があるね

「う～ん、あんまり物壊したりするのは良くないんだけどな～

む～、力の調節ちゃんとしといてあげとけば良かったよ」

実を言うと零君には使う能力の話がヒートアップしすぎて他の細かい説明をできなかった（というか忘れてしまっていた）

「ともかく零君を探そう！」

よし、ワープで行こう！

え～と、あ！あった♪

シュン！

◆◆◆◆

海鳴市　海岸沿い

「ふう～、結構歩いたな」

俺は一時間ほど歩き海鳴市の海岸沿いを歩いている

辺りはすっかり暗くなっており町の光がよく目立っている

「今日は探すのはやめるかな」

急ぐことじゃないし

なんて考えていると――――

バタンッ！

という何かが倒れる音がした

……嫌な予感がする

音がしたほうを向いてみる

「うー、おなかが限界だよぉ～」

「……何してんだよ……」

ここにいる筈がない女神・リニスが俺に手を伸ばしていた

「ご、ご飯を…！食べ物を…！私に…」

「…はあ、後で説明してもらうぞ」

じっくりとな

～移動中～（リニスを担いで）

公園

ひとまずロー○ンでおにぎり四つ、パン三つ、L○キニつ、ジュース二本を買い、今はなのはが練習していた公園のベンチにリニスを寝かせ、俺も座ってL○キを食べている

ちなみに金はリニスのポケットから小銭（五百円玉多数）が出てきたのでそれを使った
なんで小銭……？まあ、いいか
にしても夜で良かった、こいつの服装は普通じゃないから目立ちまくるし

「う、う～ん」

L○キの匂いに釣られたのかリニスが起きたようだ

「うう…は！？た、食べ物～！」

涙を流しながら買ってきたものを食べるリニスを見ながら俺はジュースを一口飲む
あ、俺も何か――

「ご馳走様～♪」
「って早！？全部無くなってるし！」

まだL○キしか食べてないんだが…
そんな俺の気持ちも知らずにもう一本のジュースを飲み干す女神

「で、なんでお前がここにいる」
「ふぇ？」
「だから、なんでお前がここにいるんだよ」
「いや、私も転生したから♪」
「は？」

…今ありえないこと聞いたような
落ち着け、まずは落ち着いて状況を把握しろ

「私も転生したから」
「なんでだよ！」

こいつは俺に考える暇をくれないようだ
てか転生って！？

「なんでお前も転生してんの！？」
「楽しそうだから」
「仕事しろよ！この駄女神ぃ！」
「へ？仕事は全部済ませてきたよ？」
「な、なんだ以外にちゃんとしてるんだな」

駄女神はひどかったかな…

「うん♪零君の力の調節とか色々と間違えたけどね♪」
「謝罪の気持ちいらなかった！」

やはり駄女神かこいつ…！

「ていうか、お前が転生して大丈夫なのか？」
「ん～、多分大丈夫じゃないかな～」

多分て…そんな曖昧な事を

「ほら、神自身が転生したら世界に影響があるとか」

神の力とかヤバイだろ…

「あ～、大丈夫だよ～力はほとんどセーブしてあるから」

「どれくらいに？」
「ＳＳＳランクくらいしか出さないから♪」

それでも相当すごいんじゃ…
だってなのは達でもＳとかだぞ？
ん？とすると俺は…？

「俺ってどれくらい出せるんだ？というか俺の魔力量ってどれくらいにしたんだよ？」

そう、こいつはなぜか俺に能力以外の設定をさせてくれなかった
まあ、設定するんだったら強くしてくれとは言っておいたが…

「ん？え～とね…確かＥＸランクぐらいにしたと思うよ？」
「確かって…お前が決めたんだろうが」

でも、ＥＸランクか～…よく聞く単語だけど実際に強いのか？

「あ～でも、零君が出せる魔力はＡＡＡくらいだよ？」
「え？今ＥＸって言ったよな？」
「魔力素質値はね。だけど、魔力自体を操る感覚が曖昧にしか分からないでしょ？」
「ま、まあ…」
「だから、ＡＡＡランク。でも、身体能力とかは格段に上がってるからそれくらい出せるんだよ♪」

人差し指をビシッっと俺に向けながら言ってくる
な、なるほど。ということはこいつの手違いだけじゃないわけか…
あー、嫌な予感がまたしても

「お前…ＥＸまで魔力出す特訓とかするんじゃ…」
「ふえ？そうだよ？」
首を傾げながら不思議そうにリニスは言う
そんな当たり前のように…
特訓ってなんか痛い思いをするようなイメージがあるんだよな～
「俺、なるべく痛みのない安定した特訓が良いんですが…」
「え？零君痛めつけられるの好きなんじゃ…？／／／」
「何言ってんの！？」
いつのまに俺は変態に！？
あと頬染めるのやめて
「あはは～、冗談だよ～特訓って言っても魔力のコントロールとかが主だから
体術とかは魔力がある程度安定してからにするからね♪」
「俺の変態疑惑も冗談にしろ！！」
「あ、空明るくなってきた～♪」
「話聞けよ！！」
はあ、なんかどっと疲れたな…
その時の朝日は一段と身に沁みた
◆◆◆◆
あの後、リニスがまたも腹が減ったとかしきりに言うから再びロー○ンに行き食べ物を買いあさり、またも公園へ行き食事をし、現在はキャラクター達と接触をしようと街中を歩いている

「そういえば」
「ん？らに～？」

さっき買った饅頭を頬張りながら答えるリニス
それと今食べている饅頭は十袋目だということを知っておいてほしい
女神が食いしん坊キャラって…

「俺の容姿が完全に変わってるんだが…」
「えへへ～かっこいいでしょ～♪」

鼻でフフンと笑いながら言われる
まあ確かにかっこいい
髪は金、瞳はさっき鏡で見たが蒼だった
顔も普通に良かったが…

「身長も縮んでるんですが」
「ああ♪それは年齢を十四歳に設定したからだよ～♪」

ああ、だから目線が低くなってたのか

「転生しててんぱってたから気が付かなかったな～」

気が付けよ！
てゆーか年齢の設定にはツッコミ無しか！

「あれ？なんか声が…？」
「どしたの？」
「…気のせいか？
いや、なんでもない」

さて、ある程度は今の状況分かったしストーリーを進めようかな
まずはなのは辺りを探すか

「でも探すって言ったってな～」
「簡単にはねえ～」
「ああ」
「「見つかんないよな（ね）～」」

この海鳴市は結構でかい上に俺達には土地勘がない
アニメで視たとはいえどこに何があるかなんて分かるはずがないし…
どうするかな～…
すると――――

ドンッ！

「きゃっ！」

やべ、よそ見してた
謝らねえと

「あ、すいません
……ん！？」
「い、いえ！
こちらこそすみません！」

あ、あれ？この田村ゆかりヴォイスは…！？
そして、こ、この愛らしいツインテールは…！？（この間約０．５秒）

「「い、いたーーーーーーーーーーー！！？」」

「ふぇ！？」

魔王様こと高町なのは嬢その人だった

――――To Be Continued

第二話　遭遇（後書き）

ファ「はい…キャラクター出ました」

零「確かに出たけど…少しだぞ？」

リ「しかも会話ほとんどできてないしね～」

ファ「……次回は」

零・リ「「（逃げた…）」」

ファ「コホン…頑張ってフェイト辺りとは会わせたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします」

零「あ、人物詳細とかは無いのか？」

ファ「ああ、余裕があったら頑張ってみようかと…」

零「まあ、頑張れ」

リ「ではでは～♪」

第三話　翠屋へ

お、驚いた…こんなにすんなり会えるとは。
今俺とリニスが指差している少女――――高町なのは――――知っての通り「魔法少女リリカルなのは」の主人公だ。俺は驚きの表情で、リニスは目を輝かせてどちらも別々の反応を示していた。
うん……このロリヴォイスはすばらしい…本当すばらしいぃ。
それにしても、実際見ても本当に可愛いな。分かってたけど。
急に大声出して指差してしまったからだと思うが、気が付くとなのはは困惑と怯えが混じった顔をしてこちらを見ていた。

「あ、あの……私が何か…」

普通はそういう反応だよね。
このままだと空気が悪すぎる、変えねば。

「お、おい、とりあえず指差すのはやめろ」
「はわー、なのはちゃんかわいいよぉ～♪」
「なんか危険な香りが…」

とりあえずヘッドロックで止めておこう。
さて会話会話っと。

「ごめんな、なんか驚かせちゃって」
「い、いえ、大丈夫です」

ぺこりとお辞儀をして言うなのは。
さすが礼儀正しい。

「小学生？」

分かりきってることだが一応聞いておくことにした。
俺の質問に笑顔で答えるなのは。

「あ、はい。私立聖祥大学付属小学校に通ってます」

そういや通ってる学校って聖祥学園だったな。
…知らない人にあんまりそういう個人情報言わないほうがいいんだが…。
なのはが着ている制服はアニメでも見たとおり白を基調とした物だった。
綺麗な物だと思ってたけど実際に見るとさらに綺麗に見える。そういや聖祥って大学までエスカレーター式の私立学校だっけか？
するとヘッドロックをしたままにしていたからか（１００％それが原因）リニスが腕を叩いてきた。

「く、苦しいよ…！零君…！」
「おお、すまん」

パッ
ゲホゲホっとむせるリニスを放置しなのはの方を向く。

「じゃあな。ええと……」
「あ、私高町なのはっていいます」
「なのはか。いい名前だ」
「あ、ありがとうございます／／／」

ぐっ！なんて可愛いさだ！
すぐにでも抱きし――――イカンイカン思考回路が変な方向に…

「…俺は変態じゃない」
「ふぇ？あの…何か言われましたか？」
「いやね…ちょっとした言い訳を…」
「？」

君は意味を理解しないほうが幸せだと思う。
そんなやり取りをしているとリニスがふらふらしながら俺にもたれかかって来た。
ちょ…！やめろ…！やめて！俺の理性が！
昨夜辺りに背負っているとき気が付いたんだが…このリニスかなり…いや、かのフェイトさんやシグナムさんを超える胸を持っている。
ぶっちゃけ巨乳だ。それが今、俺の腕にフィットしているわけだ。
そんなことになるとうまく思考ができなくなるわけで。
思考回路がショートしかけているとリニスが元気のない声で言う。

「うう…、零君…おなかが…」
「もう空いたの！？」

胸のことを忘れるくらい衝撃的だった。
バカな…さっきまで饅頭が数袋は持っていた筈。
ふと地面を見ると———

饅頭の袋×１５

「増えてる！？」

どこにしまってやがったこの駄女神…

「早く…食べ物を…」

「あー、わかったわかった」
またロー○ン…
ガクッとうな垂れる。
何回も行くといい加減疲れる…
俺は苦笑いしながらなのはに言う。
「はあ…じゃ、じゃな、なのは」
「あ、はい」
またも笑顔で答えてくれる。
本当に良い子だ。
「うー、早く早く零君ー！」
「はいはい――――ってお前立ってるじゃん！今までの演技かよ！？」
「気合とカロ○ーメ○トで乗り越えたんだよ！」
「それ主にカロ○ーメ○トのおかげっ！つーかまだ食い物持ってやがったのかよ…」
ぎゃあぎゃあと騒ぎながらなのはの元を去ろうとする。
すると後からなのはが俺の裾を掴んできた。
「ん？どした？」
「あの…私の家喫茶店やってるんです。翠屋って言うんですけど…」
おお、あの有名な魔王の館…じゃなくてなのはの両親が経営してる店か。
「お暇があったらどうぞ来てください」
「ああ、機会があったら行かせて貰うよ」

まあ、行く気は満々なんだけど。

「はい」

あー、笑顔が眩しいぜ。

「零君～」

「分かったから、服引っ張るのやめろ」

うるさいのでさっさとコンビニに行くか。

俺はリニスを担ぎながらその場を去った。

◆◆◆◆

零夜達が去った後なのははその場に佇んでいた。

「……（不思議な人達だったな）」

怪しんでいる様子は無く、むしろ和んでいる、安心している表情で零夜達が去った方向を見つめながら思った。

なのはは、そこでハッと我に返り自分がすることを思い出す。

「あー！いけない！お店行かなきゃ！」

走り出すなのは。

走っている最中、ふとあることに気が付く。

「（そういえば…あの人の名前まだ聞いてなかった。…でも、お店の名前も言ったし…また会えるよね）」

そう心の中で呟き翠屋へと向かった。

◆◆◆◆

またもロー〇ンに行った俺達は適当に食料を買い、街中を歩いていた。

「なんでお前そんなに食うんだよ…！」

まあ…金はこいつが払うからいいんだが…

「魔力の補給のため～♪」

は？魔力の補給？

食べ物で？

「じゃあ、食べ物じゃないと補給って無理なのか？」

「ううん、零君からも補給できるよ」

ガシッ

リニスの頭をがっちりと掴む。

こいつは…！

「そういう重要なことは早く言えよ…！」

「れ、零君…か、顔怖いよ…？」

「何回俺がお前を担いだと思ってんだ…？」

「ご、ごめんなさい…」

リニスがしょんぼりしながら謝ってきたのでさすがに戸惑った。

慌てて掴んでいた手を離す。

「まあ、それは置いといて。リニス、お前翠屋がどこにあるか知ってるか？」

「…ごめん。知らない」

……ちょ、え、なんでしおらしいの？そんなにきついこと言ったか俺？

わわ！涙目になってる！！

「……」

「おい！悪かったって！…そんな落ち込むなよ。なんでも言うこと聞いてやるから、な？」

はあ、こういう空気嫌いなんだよな…。作っちまったの俺だけど。でも、女泣かせるとか…うわ、さっきの俺を殴りたい！

唸っているとポツリとリニスが言った。

「じゃあ…零君の手料理が食べたい」

「は？手料理？」

いや…そりゃ作れることは作れるが…

「…いい？」

「いいけど…そんなにうまくないぞ？」

「いいよ。食べてみたい」

はあ…そんな期待されると困るんだけどな…

ま、それくらいは聞いてやるか。

「じゃ、また作ってやるよ」
「うん♪ありがと、零君♪」
「ああ」

その時のリニスの笑顔を不覚にも可愛いと思ってしまったことはリニスには秘密だ。

◆◆◆◆

「…さすが女神様ってか？」
「う～ん、私にこんな特殊能力があったとはね～」

さっきの騒動から元気を取り戻したリニスと翠屋を探していたわけだが、道が分からないので（なのはに聞いておけば良かったんだが）リニスの女神様の勘に頼ることにした。
本当に適当に進んでいた筈なんだが…

「見事に着いたな」
「見事に着いたね～♪」

いやー、本当にリニス様々だな。
さっきのことを俺が再度謝ろうとしたらリニスに笑顔で『もう気にしてないから大丈夫』と言われてしまった。
はは、さすが女神様と思ったね。
やっぱり食い意地が張ってるだけじゃ――――

「さあさあ！零君！あの有名な美味しいケーキを食べるよ！アニメ見てたときから美味しそうだったんだ♪」
「……うん」
「いざ！しゅつじ～ん♪」

さっきのことが幻に見えた今日この頃です。
ええい！どうにでもなれ！！

「おらーー！入るぞ！」
「おー♪」

ドアノブを捻り店へと入る。

カランカラン

入ると中にはなのはではなく――――

「あ…いらっしゃいませ」

そこにいたのは美しい金髪に、引き込まれそうになる真紅の眼をした少女。

「ふぇ、フェイト…？」
「え…？なんで私の名前…？」

あ、やば…
会うの初めてなんだから名前言ったら怪しまれるだろうが…バカか俺。
そこでリニスが仲裁に入ってくれる。

「あはは、なんでもないよ～♪気にしないでね？」

そこで俺の方を向き顔を近づける。

『もう〜、むやみにあんなこと言ったら駄目だよ〜？』
「お、おう。悪ぃ…」
『あ、それと念話使えるからね♪』

お、マジか。
少し意識を集中し心の中で喋ってみる。

『こんな感じか？』
『そーそー♪』

よくできました〜という感じで頭を撫でられる。お前は俺の母親か…
っとまずは席座るか。
フェイトは途中まで俺達のほうを見ていたが、席へ案内しないといけないと思ったらしく誘導してくれようとした。
って言っても今はなぜか客の姿が一人も見当たらなかったからすぐ近くの席に誘導してもらう前に座った。

「ふう…」

席に着いて安堵の息をつく。
やっとゆっくりできたような気がする。
そうこうしているとフェイトが慣れない様子で注文を聞いてきた。
手伝いでもしてるんだろうか？

「あの…ご注文は…」
「ん、ああ、ごめんな。じゃあ…コーヒーと」
「オレンジジュース！」

ニコニコしながらリニスが言う。
お前は子供か…

フェイトが驚いてるぞ。
まあ、見た目はリニスのほうが少し年上に見えるからな。
「…あとショートケーキ二つで」
「あ、はい」
タタッ
店の奥に消えるフェイト、注文を伝えに行ったのだろう。
フェイトがここにいるってことは…ヴォルケンズ達とはもう会ってんな。
それから少ししてフェイトが注文の品を持ってきた。
テーブルの上にそれらを置き、軽く会釈をして店の奥へと入っていく。
店内は俺とリニスだけになる。
「なあ、俺達の住むところとかあるのか？」
俺は、コーヒーを飲みながら質問する。
リニスはケーキをフォークで刺し、美味しそうに頬張りながら答える。
「うん♪一応天界から出る前にマンションは取っといたよ？」
ホッ、それを聞いて安心した。野宿は勘弁だ。
「あーでも、零君の能力使えば簡単に作れるんじゃない？」
「おー、そういやそうだな」

俺が転生前に授かった能力は「創造（クリエイション）」。
まあ、名前は最強に見えるだろう。しかし、これには少し欠点がある。

「でも、その「作る能力」は簡単に使えんのか？」

そう、この「創造（クリエイション）」は簡単に言うと、今まで見たことのある技・体術・能力・武具・道具を使えたり、出せたりするが、それを出す特訓が必要になる。
物等はすぐに出せるが、武器など扱いが難しい物だとすぐには使いこなせない。
すぐに使えるようにできないかと言ったが“それだと身体・能力の向上とかができなくなるよ？”と言われたのでしょうがなく折れた。
ちなみに転生前の俺の身体で「創造（クリエイション）」を使うと身体が耐えられず“破裂とかしちゃう”らしい…
転生した先でそんな惨い死に方はしたくない。

「でもでも、学力とか頭の良さは上がってるんだから錬金術とかは使えるかもよ？」
「…錬金術…あの某鋼のみたいなのか」

やべぇ…ワクワクが止まらねえ…
コーヒーを飲み干し、ケーキの最後の一切れを口に含み、明日の予定を目標の如く言う。

「…よし、明日はフェイトも見つけたことだし、はやて探索&特訓に決まりだ」
「おー♪」

リニスも食べ終わったようなので店を出ようとする。

……あれ？なんか重要なこと忘れてないか？
う～んと……あ。

「なのはに会いに来たんだった…」
「そーいえば、そうだったね」

苦笑してる場合じゃないぞリニス。
あれ？でも、さっき俺達と別れたんだからここにいる筈だよな。

「あの、お会計を…」

横を向くとフェイトが不安そうな様子で会計を聞いてきていた。
おお、金払うの忘れてた。

「じゃあ、これで」

そう言ってお札を渡す。
受け取ったフェイトはレジの前に行き、慣れない手つきで会計を済ます。
フェイトかわええ～…いかんいかん、また危ない衝動が…
お釣りを貰い、フェイトに聞く。

「あのさ…ここに君くらいの年齢で栗色の髪の色した子っているかな？なのはっていう子なんだけど…」

フェイトは少し困ったような顔をして言った。

「なのは…ですか？奥に居ますけど…」
「ごめんけど、呼んでもらえるかな？ちょっと伝えることがあってね」

「あ…はい」
再び店の奥へ走っていくフェイト。
少しすると奥からなのはが出てきた。
「よ、なのは。来たぞ」
フランクに手を上げながら挨拶をする。
「あ…ええと」
「そう、それだよ。俺名前言うの忘れてただろ？だから言いに来たんだよ」
「悪かったな」と付け加えてなのはに言う。
「ふぇ？……わざわざ？」
「おう。俺の名前は赤羽零夜。改めてよろしくな、なのは」
「あ、はい。零夜さん／／／」
微笑みながら握手する俺となのは。
その雰囲気を壊すかのように横からリニスが俺を突き飛ばし、なのはの手を握る。
「私はリニスだよ♪よろしくね、なのはちゃん♪」
「はい。リニスさん」
俺にしたようにリニスに笑顔を向けるなのは。
「えへへ～♪かわいいね、なのはちゃんは」
「そ、そうですか？」

「そうだよ～♪」
「あ、ありがとうございます／／／」
…ってなんでお前がフラグ立ててんの！？
すると、なのはが「あ！」と何かに気が付いたように声を上げ、フェイトの方へと駆け寄った。
「零夜さん。この子が私の親友のフェイトちゃんです」
「ちょ、ちょっと、なのは」
恥ずかしがるフェイトを強引に前に突き出すなのは。
「ほら、フェイトちゃん。挨拶挨拶♪」
「あ…あ、あの…ふぇ、フェイト・T・ハラオウンです。よ、よろしくお願いします／／／／／」
ぺこりとお辞儀をするフェイト。
ぐはっ！な、なんていう破壊力！
照れている様子が…か、可愛い過ぎる…！
くっ、待て…落ち着け俺…平常心を保つんだ。
「あ、ああ。よろしくな、フェイト」
「…はい、れ、零夜さん／／／」
……あ、鼻血が…
「？零夜さん？」
「あ、ああなんでもない！と、ともかくよろしくな。二人とも」
優しく二人の頭を撫でる。

すると、二人とも黙り込んでしまった。
あ、あれ？
「「……／／／／」」
はー、にしても…こんな良い子達がいずれは魔王や死神に…
時間の流れは恐ろしい…
「じゃ、そろそろ俺らは帰るな」
「あ、はい…」
「ん？どした？」
なのはが何か言いたげな表情をしていたので足を止める。
「あの…零夜さんってこの近くに住んでるんですか…？」
「へ？ああー……ま、まあそうなるよな？」
リニスに目配せしながら聞く。マンションの場所のことを聞いてなかった。
「うーん、まあ近いね～」
「だとよ」
「そ、そうですか／／／」
「ん？うれしそうだな」
もじもじしているなのはに笑いながら言う。
「ふぇ！？…えへへ…まあ／／／。ふぇ、フェイトちゃんもうれしいよね？／／／」
「えっ！？／／／。う、うん／／／」

「はは、そっか」

そう言いながらドアノブを捻り外に出る。
出ると外は少し暗くなっていた。じゃ、いざマンションへ。

「じゃな」
「バイバーイ♪」

俺は軽く手を振りながら、リニスはブンブンと元気よく手を振って翠屋を後にした。

――――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第三話　翠屋へ（後書き）

ファ「ふう～、疲れた…」

零「おお、文字数は前よりも多いな」

リ「頑張ったね～♪」

ファ「ああ、課題そっちのけで頑張った甲斐はあった」

零「いや、課題はやれよ」

ファ「正直…提出物燃やしたいんだ…」

零「言動が危険だぞ…まあ、気合で乗り切れ。さ、次回は？」

ファ「はあ…次回ははやて達と合わせたいと思っています」

零「やっとか…」

ファ「やっととか言うな！」

リ「じゃあ、ヴォルケンズも登場？」

ファ「んー、多分…」

零「今回、俺の能力のことがちょっと出たな」

ファ「ああ、それは前回も言った人物詳細とかで色々書くから」

リ「それはできたの？」

ファ「…いや、まだです」

零「まあ、近いうちに更新はするんだろ？」

ファ「…頑張る」

リ「また…」

零「はあ…それでは次回で」

人物詳細（前書き）

えと、人物詳細ですがうまくできてるかどうか自信無いです。
そこらへんも理解してもらって読んでもらえたら…
あと技など諸々のネタバレありですので、そういうのが嫌だという人は戻るを押してください。

人物詳細

名前：赤羽零夜（生前と同じ）
年齢：１４歳（生前１８歳）
性別：男
身長：１６５ｃｍ（生前１８１ｃｍ）
体重：５９ｋｇ（生前６８ｋｇ）
髪の色：金（長さは小さくポニーテールに出来るくらい）
眼の色：蒼
魔力光：黒
魔力ランク：ＥＸ（初期時は使いこなせず全力でＡＡＡランク相当しか出せない）
魔力変換資質：大体全て
性格：基本的に誰にでも優しく、お人よしで世話好き。

能力
創造（クリエイション）：
見たことのある技・体術・能力・武具・道具を出す・使える（使う技によってはコツを掴むのが難しいためすぐには完全に使えない）
オリジナルのものを創ることも可能

アース：
あらゆる自然現象・自然物を操ることができる
（嵐・地震・雨・水・空気…ｅｔｃ）
技
・絶氷（ぜっひょう）
・黒雷（こくらい）

※他にも多数

デバイス

名前：フィアレイト
待機状態：指輪
戦闘状態：刀
非人格型アームドデバイス
刀身の色は赤黒く禍々しい。鞘もそれと対になっている。
物質を石化・原子分解する斬撃を放つことができる（斬撃を放つ時には刀身が漆黒に染まっている）。
他にも魔力などを込めることができ、そのためカートリッジシステムなどを使わなくても強化可能で、アースの能力を用いて自然の力を宿すことができる。

名前：リニス
年齢：１９歳（実年齢は不明）
性別：女
身長：１６１ｃｍ
体重：???
髪の色：金（長さは腰に届くくらい）
眼の色：淡い赤
魔力光：白
魔力ランク：ＥＸ（力をセーブしているため最大ＳＳＳまで）
魔力変換資質：大体全て
性格：明るく人懐っこい、甘えん坊。子供っぽい。

能力
アンリミテッドフォース：

身体能力・魔力の強化、それと同時に女神の状態に戻る。
三分程度が限度。
別名、ウル〇ラマンモード。

ユニゾン：
零夜とユニゾンする能力
（一応リニスは零夜のユニゾンデバイス的存在）
ユニゾン時は髪は金で長さはリニスぐらい、眼は右が蒼で左が赤
魔力光は黒と白で容姿は零夜が主。

※女神の状態の時には他にも多数の能力が使える

人物詳細（後書き）

零「んー……チートだな」

ファ「まあ、思う存分暴れなさいな」

零「てかリニス強くね？」

ファ「まあ…仮に女神だから…リニス（笑）は…」

零「そうだな、女神だもんな…リニス（笑）…」

リ「酷い言い草だよ！」

第四話　死ぬ気で殺らねば殺られる…（前書き）

はい…更新です…遅くなりました…グフッ…
う、うまく書けねぇ…

零・リ「さあさあ、キリキリ書け（いて）」

はい…ではどうぞ。

第四話　死ぬ気で殺らねば殺られる…

「あー、可愛いかったなー」
「そうだね～♪」

翠屋を出た後、俺達は店で話していたマンションに向かっていた。かれこれ十分くらい歩いている。だがそれらしいマンションは見えない。
…本当にあるんだろうか…？

「お前本当にあるのか？マンション…」
「そんな心配しなくてもあるよ？マンション」
「…ならいいけど…」

少々の不安を残し歩くこと数分、少し時間は掛かったが目的の場所に着くことができた…

「……これ？」
「うん♪これだよ！」
「……」

胸を張って自身満々な口調で告げるリニス。
俺は首を四十五度とかではなく、ほぼ九十度にしてその建造物を見ている。目の前にあるのは遥か上まで聳え建つ超高層ビル。……ビル……？その周りには銅像やらなんやらが飾ってある庭園。…銅像…庭園…？
へー、スッゲーナー……じゃない！

「マンションじゃなくないか？」

「いやこれマンションでしょ？」

さも当たり前のように言われる。
そう見えるんだったら一度眼科行って来ると良いよ。どう見たってマンションには見えんぞこれ。どっちかって言うと高級ホテルに見える。
入った瞬間シャンデリアとかありそうだ。

「んじゃ行くよー♪」
「……おー」

もうほっとこう。
そんなことを言い合いながら赤い絨毯が敷いてある道を抜け玄関まで来る。…ここ絶対マンションじゃねえ…。
そこからエレベーターに乗り部屋まで行く。昇っている時に眺めを見たが、結構な街中にあり他にも色々と建っていたので買い物などは楽そうだ。

「着いたよ～」
「おおー」

部屋の中は外からも分かるように高級感溢れる物だった。
ひとまず部屋の中央のソファに腰掛ける。

「しょっと……あー、……リニス～？」

間の抜けた声で呼ぶ。リニスは台所にある棚から何かを探しながら応える。

「ん～？…なに～？っと…ここかな……」
「何してんだ？」
しゃがんでいるリニスを覗き込みながら聞く。
「ちょとね～、おおー、あったあった♪」
「ん？なんだそれ？」

リニスが持っているのは黒いダイヤ（？）が装飾されている指輪だ。
すると「え？」という声を漏らしこちらを向くリニス。
「何って…これ零君のデバイスだよ？」
「もお、天界で話したよ？」と付け加えられやれやれと呆れられる。
いや、すっかり忘れてたわけじゃないんだけどな…。
「あ、ああ。デバイスだろ？俺のデバイス」
「そーそー…ええと、設定はこれで良いんだよね？」
書類…ではないが何かそれっぽい紙を渡される。
「それと、もう一つの能力のことも書いといたよ♪」と言われた。
ごくろーさん。
えーと…
資料に目を通す。

使用者：赤羽零夜
名前：フィアレイト
待機状態：指輪
戦闘状態：刀

非人格型アームドデバイス
原始分解、石化能力

アース：
あらゆる自然現象・自然物を操ることができる。
同時に力を操ることも可能

「それで大丈夫？」
「ん？ああ大丈夫だと思うぞ」

俺が決めた通りにちゃんとなってるし。
俺が了解を出すとリニスはふらふらしながら俺が座っていたソファにダイブする。

「ふへ～」
「…そういやお前、今腹空いて――」
「食べる！！」

「今腹空いてるなら何か食べるか？」と全文を言うまでもなく答えが返ってきた。
慣れたから良いが…

「何が食いたいんだ？」

てか、俺って何か得意料理とかあったけ？
…うーん…ま、リニスだから量を重視した料理か？

「えと…高級なネタを万遍なく使ったお寿司を「寒いしシチューにするか」ふぇ！？」

じゃ材料買いに行きますかね。
どこのスーパーが良いか…。やっぱり安さとかは重要だよな。

「ねぇ！！私の意見は！！？」
「あー、うるせーうるせー。俺は寿司握れません。文句あるなら出前でも取りなさい」
「じゃあ取るー！！」

お前が手料理が食いたいって言ったんだろ…！
リニスは眼科に加えて脳外科も行って来た方が良いと思います。
愚痴を言いながら俺達は家を出た。

◆◆◆◆

「～♪あ、私、飲み物炭酸類がいい～♪」
「はいはい。炭酸な」
「あとねあとね」

あれから晩御飯はシチューに決定し（リニスに言うことを聞かなければ甘い物禁止令を発令し強制）現在材料を買いに近くのスーパーへ移動中。

「ねーねーお菓子買ってもいーい？」
「俺が決めた範囲内ならな」
「やたー♪」

ニコニコしながら走り回るリニス。……何回もお前を女神として見

ようと努力したがそれもそろそろ終わりにしようかな……。
そう思いながら呆れて見る俺。それに気付いたリニスは満面の笑みを浮かべながら服の端を掴む。

「あ、この姿かわいいでしょ〜」

「えへへ」と笑いながらくるくる回る。
因みにこの姿とは魔力を省エネするためリニスがしている幼児化のことで、リィン？位の体型になっている。

「ああ、それは認める」
「欲情する？」
「しない」

ふー……いいか？俺は可愛いもの好きなんだ。断じてロリコンじゃない。
可愛い物好きとロリコンはまったく別のものだということを教えてやりたい。

「じゃあ、なのはちゃんとかフェイトちゃんは？」
「……し、しないよ…？」
「……」

い、いやだってリニスは見た目は子供、頭脳は大人（？）のコ〇ン君状態なわけだろ！？合法ロリなんだろ！？

「ま、零君のロリコンは今に始まったことじゃないしねー」
「待て待て待てリニス、お前は今全力で勘違いしている」

それにお前と出会ったのはついこの間なんだが…？

「じゃあ変態度を？」
「違う！！」
じゃあって！？…お前の頭の中を一回見てみたい…やっぱ脳外科も行って来いよ。
そうこうしているうちにスーパーに着いてしまった。
「着いた！わーい♪お菓子お菓子～」
きゃっきゃっとはしゃぎながら店に入って行くリニス。
まあ周りからは、はしゃいでる子供にしか見えないから騒いでも微笑ましく映るから大丈夫だろ。
「おーい、あんま走ると転ぶぞ」
「大丈夫～……ふぎゅっ！」
言ったそばから…。
まあ…心配なので急いで近づく。
「よいしょっと…」
手際よくリニスを立たせほこりを掃い、無事を確認する。よしよし。
「零君お母さんだ♪」
「誰が…」
「うーん…やっぱりロリk「違う」ちぇ～」
「さっさと材料買って帰るぞ」
「はーい」

返事だけじゃなくて会話もそれぐらい素直にしてくれ。…ある意味会話も素直だけども。
店のカゴを持ち材料を探す。

「じゃ、私はお菓子売り場行ってきます♪」

ビシッと敬礼される。俺もビシッっと言ってやる。

「カゴにいれたらそこで待ってろ。速攻で行くから」
「はーい♪」

立ち去ろうとするリニス。手に三つのカゴを持ちながら……おい。

「カゴは一つ。三つもいりません。ほら貸せ」

そう言ってカゴを二つ取り上げる。

「あ！…もお、いちいちうるさいと娘に嫌われるよ？」

娘なんかいねーよ…！
リニスはぶつぶつ言いながらお菓子売り場へ向かっていった。ぶつぶつ愚痴りたいのは俺だよ。
それから材料を一通り選び、シチューの素を探しにコーナーへ。

「ええと……お、あったあった♪」

下の段にあるのを見つけしゃがんで取ろうとする。
お、あと一つか。ラッキーラッキー。
すると横から手が伸びてきて手が当たってしまう。

「あ…」
「ん…？」

俺が手が伸びてきたほうを見ると。

「あ、すいません。それ差し上げます」

ぺこりと車椅子に乗りながら頭を下げられる。
はやてキターーーー！？ここでですか！
いやちょ、ちょっと待て。

「ハハ、俺はいいからどうぞ」
「え…でも…」
「いいから、はい」

はやてにシチューの素の箱を渡す。

「あ、ありがとうございます／／／」

頬を染めながらお礼を言われる。まあ、言うまでもなく破壊力はバツグンです。

「いいっていいって（あああああああああ！！かあいいいいい！）」

本音は心の中で叫び表情はポーカーフェイスを貫き通す。
よし、いつもの如く――――瞬間…俺の目にある人物が映った。…
シグナムだ……あの鋭い眼光は間違いない。真っすぐこちらに向かってくる。どうやら俺の存在にはまだ気が付いてないようだ。

「どうかしました？」

「い、いや…」

…て、なんで俺恐がってんだ？別に心配することないんじゃ…逆に嬉しいことだろ。リアルシグナムに会えるんだから。

うん、何も心配することないない。

あ、シグナム来た。

「主、材料はこれでよろしいでしょうか？」

「ん、ありがとなシグナム」

こうして見てると本当の家族に見えるよなー。いやー良いことだ。

ふと、シグナムの方を見る。まあ何もしてないし、いきなり睨まれるなんてことは――――

「……」

めっちゃ睨まれたよw

…え？俺なんかした？ちょ、マヂ恐い。ここはひとまず……

…速攻で離脱だ…！

「じ、じゃあ俺はこれで…」

「ちょ、だ、大丈夫ですか？なんか顔青ざめてますよ？汗も凄いし…」

横見て…横。原因は君のすぐ近くだよ。

「だ、大丈夫大丈夫…それに連れもいるから、そろそろ戻らないと」

「そ、そうですか？」

「じ、じゃあね」

そそくさと立ち去る。リ、リニスさーんー！

「？本当にどうしたんやろ…？」

「……（今の魔力…気のせいか）」

「どうしたん？シグナム」

「い、いえ何でもありません」

「そうか、なら早く帰ろか。ヴィータ達も待っとるしな」

「はい、主はやて」

◆◆◆◆

「はあ～やっちゃたなーやっちゃたよ…」

もう少しうまく出来ていれば…。

あの後買い物はリニスの選んだお菓子（カゴ三つ分）だけを買い帰宅。俺はソファに腰掛けうなだれていた。そんな俺にリニスは買ってきたお菓子を頬張りながら言葉の追撃をする。

「へられだね～（へタレだね～）」

「くっ…！認めざるを得ない…」

てか、なんで睨まれたんだ…？

怪しい部分でもあった……魔力か！

「リニス、聞きたいことがあるんだが…」

「ふぁい、らに？（はい、何？）」

「お前…俺の魔力って今どうなってる？」

「どうって普通だよ？はむっ、おいし～♪」

「普通とは？」

「んぐ、普通って垂れ流し……ハッ！」

やっぱり調節してなかったなこの野郎！

「だ、大丈夫だよ…多分」

「多分て……」

ま、済んだことは置いとこう。なにシグナムに危険視されただけ……会った瞬間斬られないことを祈ろう…。

と、取りあえず能力の練習でもするか。

ソファから立ち上がり伸びをする。

「よし、戦闘修行に能力修行始めるか」

そろそろ能力を物にしとかないとな。

特に「創造（クリエイション）」で使えるものを増やすことが重要になるだろう。

「おし、修行場あるって言ってたよな？」

「あれ？明日からじゃないの？」

「いや、やっぱ修行は早いほうが良いかな～と思って」

…決してシグナムにあったときのことを考えてじゃないよ？

「ふ～ん…ま、いいや。じゃあいくよ♪」

パチン！

リニスが指を鳴らすと同時に周りが真っ白な空間になった。目の前には省エネモードではなく通常時のリニスがいた。

「さてさて、早速始めよっか♪まずは基礎的な体術とかからかな～

？」

身構えるリニス。同様に俺も構える。

「スパルタはやめてくれよ？」

そう言って苦笑する俺。

リニスは微笑みながら――

「うん♪ビシバシ行くね♪」

泣きそうです。

◆◆◆◆

「……」

「零くーん？」

ああ…リニス（悪魔と言う名の女神）のまだやれと言う声が聞こえるぅ。

あのあとマジでスパルタ修行開始。「攻撃してきていいよ？」と挑発されたので突っ込んで行ったらいきなり顔面ぶっ飛ばされて壁に激突。

起き上がって反撃しようとしたらＢＬＥＡＣＨの瞬歩的なもので近寄られ、殴りを数発蹴りを数発叩き込まれ極めつけに掌底波を腹部に…。その他にも色々と……色々と（二回目）文字通り叩き込まれた。

そして現在うつぶせに倒れている。

「た、たすけ……」
「え？もっとやり「休ませてくださいっっ！」
最早拷問の域だよ！
その後無事に能力修行も終え家に戻り就寝。

…そして、朝はすぐに来た（というか夕方）。ベットから起き上がり伸びをする。
「なんか身体が軋むんだが…」
異様にベキッベキッと骨がなる。パキパキ、ベキベキじゃない所がなんか怖い。
やはり昨日のリニスによる『フルボッコタイム♪いーえっくす』（俺命名）が原因だろう。にしてもまだ眠いな…欠伸出るわ。
「ふぁ……あふ…リニス起こしに行くか」
リニスの部屋の前まで行きノックをする。
「リニス？……おーい……」
寝てんのか？「入るぞ」と言いドアを開ける。
ガチャ

すると中には誰もいなかった。あれ？あいつどうしたんだ？
部屋を見渡すとテーブルの上に置き手紙らしき物が置いてあった。

「…なんだ？」

紙には…

少し天界に行ってきます♪

とだけ書かれていた。

「…天界ねぇ…」

ま、少しって書いてあるし大丈夫だろ。
もう一度紙を見ると下のほうに続きが書いてあった。えーなになに…

ＰＳ：修行はちゃんとやってね？

「そりゃやるだろ」

あと食生活はバランス良く

「アハハッ…お前にだけは言われたくない…」

あとあと私の下着があるけどあさらなｉ

グシャッ！（紙を潰した音）

ヒュッ！（紙を投げる音）

ポスッ…（ごみ箱に入る音）

「……さてと朝食食べますか。いや…夕食か」

何事も無かったように部屋を出る。

…帰って来たらあいつには説教が必要だ…

◆◆◆◆

「あ～と…こっちか…」

はやてとの会話（？）が微妙だったので現在そのはやてがいつも通っている図書館へ行くことにした。

まあ、十中八九会えるだろうが…付き人がシャマルだったら良いな…。

「っと、ここか…」

迷うかと思ったが無事に着くことが出来た。

早速中に入る。

「今日休日だし、もしかしたらすずかとも会えるかも…」

確かどっちも童話の本好きだったような。

「取りあえずその類のコーナーへ行ってみるか」

少し歩きファンタジーと書いてあるプレートがある棚を発見。

そろ～と棚の影から見る。

「はい…はやてさんいました～」

小声で実況してみる。まあテンションが上がってるからなんだけど。

にしてもいて良かった…。

よし…近づいて…あれ？隣に誰かいるな。

よく見てみると隣にいたのはすずかだった。

二人して棚を見上げている。どうやら目当ての本が小学生の身長では届かない高さにあるようだ。

「取れへんねえ…」

「係の人に取ってもらう？」

「せやけど…そこまでしてもらわんでも…」

苦笑しながら言うはやて。

「これ？」

「あ…」

ひょいっと本を取る。

二人に驚いた顔で見られる俺。

まあ、背が違いすぎるせいもあるか。そんなことを考えながらはやてに本を手渡す。

「物をあげるのは二回目になるな」

笑いながらはやての頭を撫でる。

はやてもこちらにきずいたようで思い出したように声をあげた。

「あ！スーパーで会った…」

「おお、覚えててくれたか～」

さらに頭を撫でる。

頬を紅く染めながら無言で俯くはやて…イカンイカン血が。そんなやりとりを見ていたすずかが口を開く。

「えと…はやてちゃんのお知り合いですか？」

「うーん、知り合いと言えば知り合い」

「知り合いじゃないと言えば知り合いじゃないかもなー」

「？」

笑い合う俺とはやてを見て疑問符を浮かべるすずか。

「ああ、まだ名前言ってなかったな。俺は赤羽零夜」

「うちは八神はやて言います。こっちの子は私の友達で月村すずかちゃん」

「月村すずかです」

「ああ、二人ともよろしく」

笑顔で握手を交わす。

「じゃあ私そろそろバイオリンの稽古があるから」
「あ、そうやったん。すずかちゃん、今日もありがとな」
「ううん、どういたしまして。それじゃあはやてちゃん、赤羽さん。さようなら」
「うん。さよならすずかちゃん」
「またな。それと俺のことは零夜でいいから」
「はい、零夜さん」

ニコッと笑うすずか。くぅ…スッゴくいい子…！
手を振りあってすずかと別れる。見送るのを止めはやての方を向く。

「さてと…はやてはまだここにいるのか？」
「えと…本当やったらもう迎えが来るはず何ですけど…」

辺りを見渡すはやて。

「まだ来てないと」
「ハハ…そうみたいですね…」

多分…というか蒐集の影響ですね確実に。

「ふ～ん…なら俺が送ってこうか？」
「へ…？」

いや、「へ？」でなくてね？

「送っててやるよ。んで家ってどこ？」
「ちょ、ちょっと…」
「ん？なに？」
「いくらなんでもそこまでしてもらうわけには…。それに零夜さん

にも色々とありそうやし…」

あ、遠慮してたのか。

気にしなくても良いんだけどなー。

「いやいや気にしなくてもいいから」

「で、でも…」

「いいから、な？」

諭すように言いながら頭を撫でる。

「は、はい…／／／」

「おし、んじゃ行こう」

俺ははやてと一緒に図書館を後にした。

第四話　死ぬ気で殺らねば殺られる…（後書き）

ファ・リ「「おかーさーん！！」」

零「はーい…て違う違う！！」

ファ「何言ってるんだお母さん。あれはお母さんだろう？お母さん」

リ「ヘタレでロリコンのお母さーん♪」

零「お母さん言い過ぎだろ！リニスは後でしばくからな！！」

ファ「まあ、んなことは置いといて」

零「え…？」

リ「零くーん、炭酸ジュースきれたー」

零「え…？何で俺…？」

ファ「無事にかはわからないがはやてに会えたロリコン主人公」

零「ちょ…！こっちはこっちで進めるのかよ！？てかその説明は色々と間違ってるから！！」

リ「さーて次回はどうなるのか？零夜お母さんの安否やいかに…」

零「え？お母さんて…ちょ…」

ファ・リ「それでは～♪」

第五話　八神家訪問と…（前書き）

デバイスの台詞は日本語で書いてます。
ではどうぞ。

第五話　八神家訪問と…

図書館を出た俺達は無駄話をしながらはやての家へと向かっていた。

「へぇ～零夜さんて一人暮らしされてるんですか」

「……今はね」

ついさっきまで二人でしたが…。

まあリニスのことは黙っとこう。

めんどいし。

「あ、ここです」

はやてに言われて歩みを止める。目の前には何回か見た（アニメで）八神家が建っていた。

「ほー、大きいな～」

「そうですか？まあ確かに広いですけど」

「ま、それはそれとしてひとまず中に入るか」

「あ、はい」

再び車椅子を押し玄関前まで行く。

玄関前まで行くとはやてが鍵を取り出しドアの鍵を開ける。

「どうぞ入って下さい」

「おう」

ドアを開けて家の玄関へと入る。

「もし良かったらあがっていってください」とはやてに言われ、お

言葉に甘えお邪魔した。
そこからリビングに案内されソファに座る。
「って俺なんか入れちゃって良かったの？」
まあ、最初から来る気ではあったけど。
「全然ええですよ、零夜さん良い人ですし」
「あ、そ、そう？」
マジか…俺って良い人に見えたのか…。自分的にはかなりキザ野郎に見えたんだが…リニスにも「ちょｗｗ零君ｗｗ」って言われたし……なんか腹立ってきたな～……。
「れ、零夜さん…？」
「……ん？なに？」
「いや…なんかごっつう恐い顔されてましたから…」
「え？ああ。何でもないから」
…極力リニスのことは忘れよう。
「それで家の人はいつ帰って来るんだ？」
「そろそろやと思いますよ」
そうはやてが言うと同時に玄関のドアが開く音がした。
「あ、帰ってきたみたいですね」
「おかえり～」と言いながらはやてはリビングを出ていった。

「……シグナムか？」

少し身体を強張らせて待つ。シグナムだった場合、戦闘に十中八九持ち込まれるだろうなー。まあ大丈夫だけど、伊達にリニスにしごかれ……いや…フルボッコにされたわけじゃないぜ。打たれ強さが馬鹿みたいに上がったからな……。

思考を巡らせているとはやてがリビングに戻ってきた。

「おお…お、おかえり…はやて」

「ど、どうしたんですか？顔色がスーパーの時みたいになって……」

いやー、やっぱシグナム恐いわー、ハハハ…洒落にならん。こんな時リニスがいれば……あー……もっと大変なことになるな…うん…いなくて良かった。そうこうしているうちに誰かが入ってきた。り、臨戦体制ー！

「ただいま～ってあら…はやてちゃんのお友達？」

「そぉい！……ってあれ？」

入ってきたのは、口調から判るようにシャマルだった。シグナムだと思ってたから変な声出しちゃったよ…。

「？どうしたの？」

「い、いや…なんでも…ないっす…はい」

「「？」」

それから何だかんだあって夕飯（二度目）を御馳走になり時は夕方を通り越し夜。

リビングのソファに座りはやて、シャマル、俺と三人で話していた。

「あはは！零夜さん、それホンマですか？」
「ふふ」
「いやいやいや、俺そん時マジだったから。笑いで済まされないから…」

というか俺の過去を暴露していた。
会話の途中ではやてが「零夜さんて昔どんなだったんですか？」と言われたので前世でのことだが話していた。そりゃあまあ不幸な学生時代だったさ……まあ、そんなことはどうでもいい。
お、外も暗くなってきたし、そろそろおいとましますか。
俺、一応中学生の年齢だしね。

「じゃ、俺はそろそろ帰るな」

そう言って立ち上がる。

「あら、まだいていいのに」
「そうですよ。せめて皆が帰るまででも」

皆が帰って来てからでは遅いんだ。

「また会いに来るから」

そう言うとはやては俺の手を持って笑顔で言ってきた。

「約束してくれますか？」
「おお、絶対また来る」

繋いでいた手をそっと離す。
するとシャマルが耳元に顔を近づけてきた。

「じゃあね零夜君。今日はありがとう……また、はやてちゃんの相手してあげてね」
「はい」
…なんか普通に照れ臭いなー…。まあ、人に感謝されるのは嬉しい。
「じゃあ」
そう言ってドアに向かった。良かった無事に終わりそう――
ガチャ
ん？ガチャ？
ってああ…ザフィーラでも帰ってきたのか。
よしザフィーラとも親交を深め「ただ今帰りました。主」「ただいまー、はやて」
その瞬間…俺は考えるのを辞めた（てか思考が停止した）。帰ってきたのは…シグナムとヴィータだったよ♪
「……」
「おかえり。シグナム、ヴィータ」
はやてが二人を暖かく迎える。そんな中シグナムは俺に気づいたようだ。
「……おい「じゃ俺帰りまーす」
そそくさと部屋を退出しようとする。
だが現実はそんなに甘くなかった。部屋を出る直前、シグナムに手

を捕まれた。力強く…それはもう力強く…！
イタタタタ！！？腕が腕がぁ！
万力の如く締め付けられるぅ！

「待て」

そう言って更に力を強めるシグナム。いや！もう足停めてるんだから離そう！？

「……主。この者は…？」
「ん？シグナムもスーパーに買い物行った時に会ってるはずやと思うけど…」

はやて辞めてぇ！更にシグナムの掴む力が強く！
くそっ！！ＨＡＮＡＳＥ！！

「ほぉ…やはりあの時の…」

くっ…ここは強引にでも…。するとシグナムは力を弱め、手を離した。
た、助かっ「ではこの者を送り届けてきます」
……え？……。

「んー、確かにもう夜遅いし……零夜さん一人やったら危ないかもなー」

ちょ…え…。

「わかった。シグナム、責任持って送り届けてや」
「いや、俺はだい「では行ってきます」えー……」

シグナムに引きずられて外に出る。……こ、この展開は……。

「来い。……人気の無い場所に行く」

……さよなら……幸せで平和だった俺の日常……。

◆◆◆◆

シグナムに連れて来られた場所は人気の無い広場だった。そこに俺とシグナムは静かに佇む。

先に口を開いたのはシグナムだった。てか俺は喋れませんでした。

「貴様……名を何という…」

「……赤羽零夜……」

静寂の中、俺は呟く様に答える。…死ぬ前に名前だけは聞いておいてやろうってことですか？

てかこの流れはバトるんだろうなあ。

「……貴様のリンカーコア…魔力を貰う」

ジャキッ！

レヴァンティンを構えるシグナム。予想通り過ぎる…てか本当に急ですね。これも運命という名の定めなのか。

「なんで魔力を欲するんだ…」

「貴様には……関係のない話だ」

そう返すよね。
……まあ、相手は戦る気満々だし…初戦闘…行ってみるか。
右手を前に出す。
「来い…フィアレイト…！」
手が発光し、右手に刀が現れた。
「……！…貴様も剣士か」
「まあ…主に使うのは剣だけど」
俺が出したのは専用デバイス『フィアレイト』。
ぶっちゃけまだ実戦で使ってなかった。
「では…行くぞ！！」
地面を蹴り、斬りかかってくるシグナム。
真正面からの攻撃なので受け止めるのは容易かったが、やっぱ衝撃半端ねぇ…。
「くっ…！！……はあ！！」
「っと…！」
シグナムに押し返され反動で離れる。
「……っ！レヴァンティン！！」
「《了解》！」
バシュ！

レヴァンティンにカートリッジがロードされた。
……は？これはまさか…。

「紫電――」
「ヤバ…」

すぐさま鞘に刀を納め、抜刀術の構えをとる。

「一閃！！」

炎を纏ったレヴァンティンの紫電一閃が繰り出される。

「絶氷（ぜっひょう）！！」

ガキィン！

紫電一閃を放ったレヴァンティンがフィアレイトとぶつかり合い先程よりも鋭い音を上げる。
俺は抜刀と同時に『アース』の能力で出した氷雪系の力、『絶氷』をフィアレイトに纏わせ、紫電一閃と相殺させる。

「っ！！」

突然の状況にシグナムはその場を離れようとする。
俺はそれを見逃さず腰の鞘を使い、脇腹に一撃を入れる。

「ぐぁっ！！」

短い悲鳴を上げ、そのまま壁の方向に吹き飛び激突する。

「……ふう……」

正直言っていいだろうか……。
……恐いよ！何これ！一歩間違えればそれこそ『レヴァンティンの錆にしてくれる…』になるところだったよ！と心の中で叫びつつ外側では冷静を装う。慣れたもんさ。

「…どうする…まだやるか？」

立ち上がろうとするシグナムに冷たい声で言う。内心ビクビクだが…。

「…この程度でやられるほど…私はやわで…はない……！」

せ、説得力ねぇ…。迫力はあるんだが。
だって剣支えに立ちながら言われてもなぁ…。
……ん？てかよく見たら…。

「シグナム…あんた…もしかして俺と戦る前から怪我とか…」
「……してない」

はい。あったんですね、分かります。
だから、鞘の不意打ちに反応出来なかったのか。
まあ、いくらリニスに剣の特訓受けたって言ったて一日やそこらで百戦錬磨のシグナムに届くわけは無い。

「……ていうか魔力が欲しいんだよな」
「…そうだ」
「理由は？」
「……まだ私は負けて「理由教えてくれたら魔力やるよ」っ！？」

あ、でも魔力ってどうやってあげるんだ？
普通に集蒐やってもらえばいいんだろうか。
と考えていると、

「ま、待て…！」
「ん？なに？」
「魔力を私たちに与えると言ったのか……？」
「そうだよ？」

てか本当にどうやって魔力あげるんだろう…。
聞いた方が早いな。

「なあ」
「な、なんだ…？」
「魔力ってどうやってやればいいんだ？」
「…リンカーコアだ…それから魔力を直接吸収する」

リンカーコア…ってあの魔力の核みたいなヤツだっけ。自分の胸部に触れ意識を集中し取り出す。
う…、なんか気持ち悪い…

「……これ？」
「……」

呆然として俺を見るシグナム。
…あれ？俺なんかした？
まあとりあえず…。

「はい」

魔力の球体をシグナムに渡す。
シグナムもそれを両手で丁寧に受け取る。

「…あ、ああ……ではないぞ！？い、いいのか？」
「いや…いいもなにも…あんた、俺から実力行使で奪おうとしたから」
「うっ……」

確かにそうだ　と言いたげで戸惑った顔をするシグナム。

「…じゃあな…またはやてのとこ行くけど、こういう物騒な事は極力止めてくれ」

そう言ってその場を離れようとする。

「待て」
「へ…？」

何故かレヴァンティンを俺に向けるシグナム。
え…？なに？

「…赤羽…理由を聞きたいと言っていたな」
「あ、ああ…言ったけど」
「……わかった。話そう」
「お、おう…ありがとう」

話は分かった……けど、じゃあそのレヴァンティンは…？

「ただ…条件を付け足してもいいか？」

あ、なんか嫌な予感…。

「私と…全力で戦って欲しい」

「……orz」

予想できてたよ…？予想できてたけどさ…改めて現実にされると、どうしても…。

「？…どうした？」

「いや……分かった、出来うる限り全力でやる」

人生、諦めは肝心。

シグナムの体力を回復、怪我を治療し万全にさせ……って何やってるんだろう…俺。

しかし、容赦なく戦闘（死闘）は始まろうしていた。（主に死ぬのは俺）。

「ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム……参る」

「…もうどうにでもなれ…」

最近こんなの多いわー……。

「…では……！？」

シグナムは何かに驚いたようで俺の背後を見ていた。えと…なに――

振り返った瞬間、顔面に衝撃が走る。

「おらあぁぁぁぁぁぁ！！」

「ぶへ！！？」

悲痛な声を放つと同時に俺の意識は飛んだ。

第五話　八神家訪問と…（後書き）

はい、やっと投稿できました。
今回、おそらく初の戦闘シーンを書いたのですが……うまく伝わったでしょうか？
うまく伝わったらのならいいんですが…。

それと最後の部分……丸わかりですね…。
もう口調なんかでわかると思います。
ですが敢えて言うと……零夜殺害（笑）に使われた凶器はハンマーです…ｗｗ。
……はい、すいません。

リ「ではでは～♪」

第六話　帰宅途中には気をつけろ

「ん……」
「大丈夫か？　赤羽」

シグナムだ……。
あれ……俺……何してたんだっけ…？

ガチャ

「あ、気がついたのね」
「シャマルすまん。……主は？」
「はやてちゃんならもう寝ちゃったから大丈夫」
「……そうか」

はやて……ここはやての家なのか。
ふと周りを見ると夕方に座っていたソファに寝ていた。ていうか……頭が果てしなく痛い。
なんかこう……鈍器で殴られたみたいに…。

「赤羽……すまなかった」

申し訳なさそうに謝るシグナム。とゆーか……あの時何が起きたんだ？
疑問を持ちながらゆっくり身体を起す。

「起き上がって大丈夫なの？」
「ああ、大丈夫大丈夫」

これより酷い目にあったことあるから。

「でも…血が出たんだしもう少し安静にしててて…」

「……え？」

なん……だと……？

「あの…シグナム…」

「なんだ？」

「……血って…」

「覚えていないのか？お前はあの時――――」

～回想～

「おらあぁぁぁぁぁぁ！！」

「ぶへ！！？」

急に背後からの攻撃を受けた零夜は、そのまま前方に吹き飛ばされる。

殴り掛かった人物は赤い帽子に赤いゴシックロリータの服、小柄な身体に不似合いなハンマー型のデバイスを持った少女だった。

「ヴィ、ヴィータ！？」

「おい！シグナム無事か！？」

「ああ…私は無事だが…」

「そうか…」

そう言ってデバイスを肩に掛けて安堵の息を着くヴィータ。

「し、しかしヴィータ…なんでここに？」

「ああ、シグナムの帰りが遅いから迎えに行こうかと思ってな」
「そうか……いや！今はそれどころじゃないぞ！」
「ん？こいつの蒐集のことか？大丈夫だよ。死なせてないから」
「そういうことではなくてだな…」
「あ？どういうことだよ？」
「悪いが説明している時間が無い。ひとまずこいつを家に運ぶぞ」

～回想終了～

「そこから急いでここに運び、シャマルに治癒魔法をかけてもらったわけだ」
「大変だったのよ？　はやてちゃんが早く寝ててくれたから良かったけど……」

治癒魔法かけてもらったわりにはまだ頭痛いんすけど…。

「それでシャマル……ヴィータはどこにいる？」
「ええと…あそこ…」

シャマルが苦笑しながら指差した先には、ドアの隙間からこちらを見るヴィータがいた。

「……」
「ヴィータ、こっちに来い」
「う……」

シグナムに呼ばれ、少しびくつきながら入って来る。

「な、なんだよ……」
「まず赤羽に詫びておけ」

「……分かったよ」
そう言い座っている俺の前に来る。
てか本当にヴィータってちっさいなー。
「……なんか今あたしのこと馬鹿にしなかったか？」
「いや全然」
なんて鋭さだ……侮り難しヴィータ……。
「ふん……わ、悪かった……こ、これでいいだろ／／／」
ぷいっと頬を紅くしながらそっぽを向くヴィータァァァァ！！いいよ！
なんなんだこの可愛さは……常識を逸脱してやがる。
更にヴィータは俺を追撃（？）する。
見られていたのが恥ずかしかったのか、モジモジしながら上目遣いで、
「な、なんだよ……／／／あんまりジロジロ見んなよ…／／／」
――萌え死にそうです…。
閑話休題
「赤羽……本当に怪我は大丈夫なのか？」
「大丈夫大丈夫」
手を頭の包帯が巻かれている所に当てる。
え～と……魔力を放出して治癒効果に変換だっけ……？

よう分からんが。
手から温もりが感じられ、頭から痛みが引いていく。

「こんなもんかな」
「何をしたんだ？」
「治癒魔法だよ」

そんなこともできるのか？　と驚きの表情でシグナムが言う。
怪我すること多かったからなー……ここ数日。

「ん、まあ」

頭を軽く小突き治療出来ているか確認する。
因みに失敗していると血が噴き出すので簡単に分別はつく。

「あー良かった、ちゃんと治療出来てて」
「ほ、本当。完璧に治ってるわ……」

シャマルが俺の頭を触って確認する。

「さて、怪我も治った所で……話してもらおうかな」
「ああ……もう一度聞くが、お前は本当に管理局とは関係無いんだな？」
「ああ、無い」

シグナムは頷くと、少し暗い様子で口を開いた。

「実は――」

そこから聞いたことは、闇の書の呪いではやての身体が蝕まれてい

ること、それを止めるために蒐集を行っていることだった。
一回は説明を聞いているものなので理解するのは簡単だった。にしても、改めて聞くと酷な話だな。
「６６６頁（ページ）埋めるとどうなるのか……シグナム達は知ってるのか？」
「いや……知らない」
一応シャマル、ヴィータにも振るが二人とも首を横に振る。
そりゃそっか…。
「分かった。俺はこの闇の書……はやてを救うために全面協力する」
「…いいのか？」
「ただし、条件を聞いてほしい」
「なんだ？」
「蒐集だが…６６６頁（ページ）、つまり全ての頁（ページ）は埋めないことを約束してほしい」
「な？！……どういうことだよ！」
ヴィータが声を荒げて俺に怒鳴るが、それをシャマルが止め宥める。
「そうだ。それだと主は…闇の書の呪いに蝕まれ最後は…」
シグナムが更に深刻な表情になる。ヴィータに至っては少し涙目、シャマルも同じ様になっている。
ちょ、これは…この空気は重い…！
まるで通夜のようだ。
「だ、大丈夫。はやては助けられるから」
そう言った瞬間、ヴィータが勢いよく身を乗り出す。

ちょ！　ヴィータ近い！近いから！

「本当か！？お前…えっと、りいやだっけ？」
「零夜な零夜。…だからさっき言ったことを守ってほしいんだ」
「頁を全て埋めないこと…か？」
「そう、それ」
「……何か手が在るのか？」
「まあな……」

まだ大まかにしか決めてないけど……多分この考えで行けると思う。リニスにも実は言ってあるが、正直うまく行くのか不安でしょうがない……。

「だが症状の進行を止めるために、ある程度までは頁（ページ）を埋めさせてくれ」
「ああ、そうしてくれ。なるべく俺も蒐集は手伝うよ」
「感謝する」

まあ、それぐらいっていうかはやてを苦しませないようにするのは俺も賛成だから。
あとの大きな問題はなのは達管理局と猫姉妹かな……。

「よし。ひとまず俺は帰るな」

アースだけでも完全にしとかないと……この先キツい。
何かあれば念話を通じて伝えるように言い、俺は静かに八神家を後にした。

◆◆◆◆

……えぇと、現在俺は自宅に戻るため帰っている最中なのだが……。
ハイ、正直に云いますと後ろから殺気を感じます。そんなに大きくはないんだが……。
んー、殺気というよりも警戒に近いのか…？
「（というか…もうかれこれ十五分は経過してるんだけどなー……）」
出て来るならさっさとしてほしいよ…。
けどそりゃ、俺魔力の量だけは多いから慎重になって当然か…。
自分で言ってて悲しいけど。
「（うし、めんどいから声を掛けよう）」
と思った矢先、突然気配が大きくなった。その人物達は俺の前に正体を現した。顔には白い仮面で長身の男。
現れた人物は…予想通り変身魔法を使用したリーゼ姉妹だった。
「……こんばんわ」
「「……」」
できるなら無言は止めてほしい。
でも、なんで俺のところに来たんだ？場所が分かったのははやての家から出て……あ、それでか、俺を追って来たのは。
大方はやての家から出て来た人物が一般人ではなく魔力を有した、しかも強大な魔力だったので怪しく思い、後を付けて来たという感じだろう。
俺がその立場だったとしても同じようにするだろう。

「……何か…ようでしょうか？」

そう訊くと（どっちがアリアでどっちがロッテかは識別できないけど）俺の前方にいる方が話してきた。

「……なぜあそこにいた。理由を訊かせてもらおう」

「（……訊く前からもう戦闘態勢に入ってんじゃん…）んー……って言っても俺が話したところですんなり帰してはくれないんでしょう？」

「……さあな」

ダメだ、俺帰す気全くないよ……この猫ども…。

じゃあ……ちょっと飛ばしていこうか。

「そうですか……ま、戦るんだったら場所を変えて……」

パキン

俺はポケットに仕舞っていた紅い水晶を割る。

瞬間、俺たちは転移魔法によって普段使っている修行場に転移した。

「「！？」」

リーゼ達は場所が変わったことに驚いているようだ。

因みにこの水晶は、俺がリニスに習って作ったもので割ると設定した場所に転移するという物だ。

範囲は水晶を割った位置から周囲約5メートル。魔力も要らないので便利だから常に持ち歩いている。

「貴様……一体」

「軽い手品みたいな物ですから、気にしないでください」
「…ッ！ふざけるな！！」
怒気を孕ませた声を叫びつつ俺に向かってくる。おそらくこっちがロッテのほうだろう。
ということは後ろのがアリアか……。そうこう考えているうちにもうロッテが俺にかなり近づいてきていた。っとやべ……。
「はあ！！」
「ぐっ……」
正面から来たロッテは足を頭上より高い位置に上げ、かかと落としを決めてくる。
当然、遠慮は無く重い一撃だ。
そのままロッテは数発殴りを入れ、一度後ろに下がる。
すると、ロッテが下がると同時に俺の体にアリアがバインドをかける。
「て……バインド？」
「少し…ジッとしてもらおうか」
いや…それ無理な相談。
休み無く前方からロッテが攻撃をしてくる。
「———寝てろ！！」
勢いよく振り上げられた拳は俺の脳天に向かって放たれる。
て、食らったら死にはせずとも血が…。
……直ぐにバインドを破壊し、右手を拳の来る方へと置く。

「フィアレイト」
瞬時にフィアレイトを出し拳を防ぐ。
「くっ……！」
間髪入れずにロッテは二撃目を入れてくる。
その二撃目が俺に届く前にアースの能力をフィアレイトに纏わせる。
「食らえ…黒雷（こくらい）…！」
俺の魔力光は黒。それにともなってアースの技も同じ色になるようで、特に雷系、炎系のものは濃く出るみたいだったのでこう命名した。
「っ！？」
効果は力加減によって変わるが今出したのは相手の動きを少し鈍らせるくらい、スタンガン並みの威力がいいところだろう。
「……魔力変換資質か」
「っ……！」
アリアはどうやら俺の出したものを能力ではなく魔力を変換させたものだと思ったらしい。というかこの世界ではその考え方が普通だ。ロッテは黒雷の影響でまだ動けずにいる。
「……いいだろう、この場は退こう」
「あれ、いいんですか？」
「貴様は元から戦う気が無かったんだろう。……それに我々の目的

は他にある」「そうですか…では」

パチン

俺が指を鳴らすと再度転送魔法が発動し、元の場所に戻った。
ロッテはアリアに肩を貸しながら去ろうとする。

「……次に会ったときは容赦はしない」
「ええ、そのときは俺も全力で……潰させてもらいますね」
「「！！」」

一瞬だけ殺気を放つとリーゼたちはビクッと身体を揺らした。

「貴様……！」
「いえ……すいませんでした。別に危害を加える気は無いんですよ」

反応してきたアリアに笑顔を浮かべる。

「ただ次はこれくらいの勢いで、戦らせてもらうということを現したかっただけですから」
「「っ……」」

タッ！

そう言い放つとアリアはロッテを抱えその場を去った。

第六話　帰宅途中には気をつけろ（後書き）

帰宅途中こんなことになったら迷わず全速力で逃げるでしょうねw。目の前に変な仮面の男が現れた……ハイ絶対逃げます。

それと前回現れた人物は、まあ皆さんの予想通りヴィータでしたね。ちなみに零夜を叩いた時のアイゼンの形態はハンマーフォルムです。ラケーテンフォルムとかギガントフォルムで叩かれたら流石にやばい……。

次回もなるべく早く更新したいと思います。

第七話　対峙

帰路についた俺はソファーに座り、一息ついていた。

「ふー……」

なんださっきの人……いや俺だけどね！

……ただの危ない人だよ……あれ。

「いや……大丈夫大丈夫。さっきの…あの二人しか見てないし、いざとなったらどうにかこうにか…で、できるだろうし？」

た、多分……。

……ま、でもアースの実戦練習にはなったから良かったと言えば良かったのか。

前向きに行こう、どっかの女神みたく……。

「つーか……そのリニス（馬鹿）はいつ帰ってくるんだ？」

……そのうち帰って来るだろ。

アイツ気にしたら負けのような気がする。

「……ひとまず寝よう」

今日も色々あって疲れた。

明日の日付になることを示す時計を見て俺は眠りに就いた。

◆◆◆◆

ピンポーン……

「んん……？」

朝、聞き慣れないインターホンの音で俺は目を覚ます。

……なんだ……？

インターホン？　誰だよこんな朝早く……はないけど。

時計を確認すると針はとっくに午前の後半の時刻を指していた。

……勧誘かなんかだろう……。

都合の良い理由を付け、再び眠りに就く。

だって眠いんだ……パト〇ッシュ。

ピンポーン……

む……意外としつこいな。居留守を図ろうと布団を被り息を潜める。

ピンポーン……ピンポーン……

……出て追い返したほうが早いかな。

俺の姿子供だし、今親がいないとでも言えば直ぐに帰るだろう。

被っていた布団を剥ぎ、玄関に向かう。

「はーい、今出まーす」

ガチャ

「はい、どなたで……」

「あ、零夜さ――」

バタン

「えええぇぇ！？　れ、零夜さん！？」

幻とは本当に恐ろしいものだ。
いつも俺に有り得ないものを見せてきやがる。
よりにもよってなのはだと……？
ハハ……寝よ寝「あの高町なのはです。わかりますか？」
に、逃げられねぇーーーー！
ってかなんで家の住所知ってるの！
くっ……今迂闊になのは達には会わない方が良いんだけど……ここはひとまず家に入れて――――

「なのは、ここで合ってるの？」
「うん、とゆーかさっきの人零夜さんだったと思うんだけど……フェイトちゃんどう思う？」

フェイトもいるんかい！
直ぐにドア閉めたから気がつかなかった……。
……仕方ない。

ガチャ

「……なのは、フェイト……は？」
「あ、零夜さん。どうしたんですか？」

応えたなのはの方を向かず、後ろに置いてあるダンボールの山に目を奪われる。
敢えてもう一度……は？　何このダンボールの山は。

「ええと……なのはさん？　これは……」

「え？　零夜さんが頼んだんじゃ……」
へ？　俺がって……。
「因みにこの中身は？」
「私のうちのケーキですけど……」
「ケーキ！？」
これ全部！？　てかこんなによく運べたな。
軽く十箱以上あるけど……。
にしてもケーキなんて頼んだ覚えは……ん？
ケーキ……だと……？
あ、なんか嫌な予感。
「……ちょっと聞くけど……この注文てどうやって受けた？」
すると、注文は電話で受けたとフェイトが言う。
「音声は俺だったの？」
「あ、はい」
嫌な予感が現実に……。
フェイトはその時の会話を覚えているらしく記憶に残っている範囲で話してくれた。
◆◆◆◆
～電話での会話（一部分）～
プルルルルル

「はい。翠屋です」
「あ、フェイトちゃ……んん、フェイト？　おれおれ」
「……え！？　えーと、れ、零夜さん……ですか？」
「そーそー、あの変な零夜さん」
「い、いえ、変とは……どうされたんですか？」
「ハハハハハハハハ♪　俺が変なのはどうでもいいんだけど……ちょっと頼みたいことがあってね。
ケーキを注文したいんだけど……いいかな？」
「あ、はい。何にしますか？」
「どれもおいしいからねー……とりあえず、全種類」
「ぜ、全種類……ですか？」
「そ、全種類。あ、それぞれ十個ずつでね。ダンボールなんかでドーンとまとめて置いといてくれたらいいから」
「は、はあ……では、いつごろお届けすれば？」
「え？　いや、いいよいいよ、わざわざ届けなくても。俺が取りに行くから」
「……え？　で、でも、それだけの数運ぶのって大変なんじゃ……」
「へーキへーキ♪
あ、でも念のため住所とか教えとくな。えーと住所は――――」

◆◆◆◆

「――――というものだったと…？」
「は、はい」

もう絶対あいつだ！
それと勝手に俺を変人扱いすんな！
……つか、頼んだ本人がいないんですが……。

～♪～♪

「ん？　通信？」

……フィアレイトから通信の着信がなる。

「少し待ってて……」となのはたちに言い残し、家の中に入る。

「はい……もしもし」

「あ、零くん？　リニスー「お前何してんの！？」ーもー……急に大声出さないでよ。耳が痛いでしょ」

「あ、ああごめん……て違うから！　何ケーキ大量に買い込んだ挙句、住所まで教えてるんですか！？　あと、人を勝手に変人扱いしてんじゃねーよ！！」

「無駄遣いしちゃってごめんなさい」

「謝るところそこじゃないからね！」

ぜぇぜぇと息をつき、一旦落ち着く。

「んで……用は？」

「へ？　特には」

「……あ？」

「ご、ごめんてば。ちゃんと用あるよ」

うん、そうでなかったら、敵わなくても本当にお前をしばきに行くよ。

「えーと、今の状況を聴きたいかなーと思ってね」

「ああ、今の状況な。簡単でいいか？」

「うん。あ、デバイスに記録されてるだろうから、それ送ってもら

ったらいいよ」

データを送信し、リニスはそれを三十秒くらいで見終わった。
そこは流石女神と言ったところなんだろうか。
「ふ～」と息をつき、リニスは記録ディスプレイを閉じる。

「んで……感想は？」
「……正直、零くんがかっこつけてて腹立ちました」
「あああああ！！　人が気にしているところを言うかお前は！？」
「特にここの笑顔を浮かべながら敬語で脅迫してるところとか」
「やめて！　自分でも後悔してるんだから！」

駄目だ、何かを失う気がする。

「と、ともかく……何時帰ってくるんだ」
「んーとね、もう少し掛かるかも。それと、八神家に行ったときの
―「よし、そうか了解した。じゃ」

ピッ……

有無を言わさず電話を切る。
ふー、緊急回避。
……さて、なのはたちはどうするか……。なるべく追い返すことはしたくない。
リニスの我が儘注文を受けて、あれだけ運んでくれたんだからな……。
罪悪感いっぱいですよ、俺がやったわけじゃないのに。

「ま、入れること自体は問題じゃないんだし」

ということで、中に入ってもらった。
小学生を家に連れ込む精神年齢十八歳の男……警察に通報されたらまず言い逃れはできないだろう。
とはいえ、見た目は十四歳なわけだから問題は……あれ？　よく考えなくても中学生が小学生連れ込むのもやばいような……？

「……」
「零夜さーん、冷蔵庫ってこれですかー？」
「あーそれだよー、適当に入れといていいから」
「はーい」

ま、そんなに気にすることないか。
て、あれ？　フェイトは……？

ガタガタガタッ！！

見渡していると不意に廊下の方から何かが崩れる音が聞こえてきた。
……運んできたケーキのダンボールはなのはが整理中なので無いとすると……ああ、あれか。
とりあえずなのはには待っていてもらい急いで音のしたほうに向かう。

「フェイトー、どしたんだー……ってああ、やっぱりか。おーい大丈夫かー？」

大量のダンボールをどけながら安否を確認。
まあ、中身が中身だから怪我は無いと思うけど……。
フェイトの手を取って埋まっている所から引っこ抜く。

「はい……大丈夫です。すいません、崩してしまって……」

「いや、全然。
むしろこっちが悪かった。こんなもん置いといて」
「あの……これって何が入ってるんですか？　とても軽いようですけど……」

崩れたダンボールの箱を眺めながら、フェイトが言う。
そうだよねー、気になるよね……これ。
別に言っても問題は無いので言うことにしよう。

「カップ麺なんだよ、それ全部」
「え？　か、カップ麺て……？」
「あれ？　フェイトってもしかしてカップ麺知らないとか？」
「い、いえ……知ってますけど。なんでこんなにあるのかなと……」

どっかのバカのせいですよ、バカの。
なんでこんなにあるのかって？　ふ、俺が訊きたいよ。
無駄に買い込みやがって、だから家にはもう食い物しか無いんじゃないかってぐらい食べ物で埋め尽くされている。
その一部がこのカップ麺の山というわけだ。他にもパフェを作るとか何とか言って、生クリーム大量購入するし……おかげでうちには冷蔵庫が一台と、この建物の地下に大型の、よく食品業者の人たちが使っているような冷蔵庫が二個……ある。

「それについて語ると、俺の愚痴話になっちゃうから……ひとまず置いといてもらうと助かるんだけど……」
「あはは……わかりました」

苦笑いで了承するフェイト。
いい子たちで助かるね本当に……。

それからは別に目立つことはなく町に出掛けて買い物をしたり、色々と見て回ったりした。そんなこんなであっという間に時間は過ぎて……。

今は夜。
なのはたちもとっくに帰って修業も終えて、平和に一日が終われば良かったんだけど……。
どうやら俺には安息は無いようだ。

「魔力反応……なのはにヴィータたちか……まあ、これぱっかりはどうしようもないか」

変にバトらないで終わったら、なのはには悪いけどそれこそ大怪我どころじゃなくなる。
なるべくこの出来事の流れは乱さない方がいいと思う。

「まあ、行くことは行くんだけど……あ、変装とかしたほうがいいんだろうか……」

ヴォルケンズにはばれても良いけど……管理局にばれるのは色々とまずい。
確かこの戦闘ってクロノいたと思うし。
あの子人の話聞かないからなー、特に自分達に害をなす者だと全くだよ。
ま、変装の道具はリニスが残していったから楽に済む。ちなみに今回の変装道具は、薬製の物なので一定時間が経つと解ける物だ。
一定時間と言っても軽く十時間はもつ……と薬が入っていた箱に書

いてあった。効果は……飲めばわかるな。
薬を飲み込み、窓から戦闘が行われている場所に向かった。

◆◆◆◆

というわけでやって来ました。やって来たわけだけど……。

「なんで……この姿？」

なぜかはわからないけど（まあ、原因はあの女神だと思う）薬の効果で姿が確かに変わった。
転生前の俺の姿に……。
クリエイションで鏡を取り出し、改めて顔を見てみる。
うわー、自分の顔だけどすっげー懐かしい。
これだったら変装は完璧だな。

ドオン！！

そう思った矢先、なにかの衝突音が響いた。
っと、始まった……かな。

市街地ビル屋上。
そこには白いバリアジャケットを身に纏った栗色の髪の少女高町なのはに、それとは対照的な黒いバリアジャケットを纏った少女フェ

イト・T・ハラオウンが、上空には闇の書守護騎士ヴィータ、青いバリアジャケットで長身の同じく闇の書守護獣ザフィーラ。
そして、双方の間には闇の書守護騎士の将シグナムがいた。

ヴィータはデバイスのグラーフアイゼンを片手に持ち、屋上にいるなのはたちを見据えている。
さらにシグナムを鋭い眼光で見ているフェイト。

「シグナム……！」
「テスタ……ロッサ？（これは……赤羽か？）……」

辺りをキョロキョロと見回すシグナム。
すると、少し離れたビルの屋上の影に誰かがいるのが見えた。

「……？　（アレは……赤羽……なのか？）」
「……？　……！」

その人物は自分の知っている『赤羽　零夜』とは明らかに見た目が違っていた。
目が合った瞬間に隠れてしまったためはっきりとは見えなかったが、気配などは先日感じたものと同じだったこともあり完全に違うとは言い切れなかった。
というよりも、目が合ってしまった瞬間の行動が零夜に似ていたというか、本人そのものだった。

「おい！　どうした！？　シグナム！」
「いや……なんでもない（……あれはおそらく赤羽だ。しかし……何故身を隠している？　というか……あいつは何をしているんだ？）」

もしかしたら……いや、あれは変装のつもりなのだろうか？
というような疑問を感じたシグナムだったが、すぐに気持ちを切り替える。
「（今はこちらが先のようだな……ならば早々に終わらせるまで）
テスタロッサ、戦るのなら早くこい。そのつもりなのだろう」
「貴方もでしょう、シグナム」
「違いないな…。……まあ、他にも理由はあるが……（次に会ったときにでも言ってやるか……バレバレだったぞと）」
「？　理由？」
「気にするな。……それよりもこないのなら……こちらから行くぞ！」

レヴァンティンを構え、フェイトに切り掛かるシグナム。それをフェイトはギリギリで防ぐ。が、バルディッシュアサルトと強化が施されたこともあり、充分に防ぐことはできた。
それでもシグナムの剣は止まらず、斬撃を連続で放つ。

――――！！

すると、斬撃の放たれた方向で悲鳴のような叫び声が聞こえたが、シグナムもフェイトも戦闘に集中していたためどちらの耳にも届かなかった。
そこからさらに、シグナムは高速で斬撃を放つ。
同じように悲鳴が聞こえたが、建物が崩れる音などでこちらも同じく聞こえなかった。

「ぐっ……！」
「フェイトちゃん！」
「……！　なのは！」

なにかに気がついたフェイトが叫ぶ。
なのはの目前に迫ったヴィータだ。ヴィータはアイゼンことグラーフアイゼンをなのは目掛け振りかざす。フェイトに気が向いていたこともあり、無防備な状態を狙われたため防御も回避も間に合わない。

「よそ見してんじゃねー！！」
フェイトもシグナムとの戦闘に入っているため応戦は望めない。

「――――！！（間に合わない！）」

アイゼンとなのはとの距離が数十センチと迫ったところで……
止まった。
止まったのはヴィータの持つアイゼンのほうだ。

「なっ！？　なんで止まるんだよ！」
「……（止めたわけじゃない……？）」

本人も驚いているところを見る限り、止めたわけではないと判断するなのは。
ヴィータはアイゼンを動かそうと引っ張ったりするが動かない。

「ああ！　クソ！　動け……！？」

動作を繰り返していたヴィータの目線がなのはの背後を向く。
何かいるのか、そう思い後ろを見る。
……しかし、そこには何もいない。
そう思い前を見る。
すると――――

「――――！」
「こら……！　暴れるな……！」
黒髪のおかしな仮面を被った男が、ヴィータを取り押さえていた。

◆◆◆◆

「これは……どうしたら」
気まずいとかいう次元じゃない。
ここに飛び込んでいけば間違いなく怪しい人物として斬られる。
顔がわからない様に一応仮面を被ってみたけど……。

というか……最初から仮面被ってれば薬なんか飲まなくてよかったのでは？　という想いが、今俺の中を駆け回っている。まあ、気配なんかも変えるって書いてあったから気づかれないようにはなるということで意味はあるだろうからいいか、という都合のいい理由をつけてそれは完結させた。いやいや……そんなことよりも今はどうやって割り込んで戦闘を終了させるかだ。
アースで凍らせたら止められるけど、間違いなく死んでしまうだろうし、黒雷は黒雷でまだ威力が弱いから広範囲で使ったら気絶まではさせられない。
うーん……。

「……よし。強行突破で行こう」

理由、ごちゃごちゃするのは性に合わない。
以上。
今までのヘタレ思考はどこかに置いてきました。
と早速出て行こうと身を乗り出した所で……固まる。

「……（ジーッ）」
「？　……！！」
い、一瞬何が起きたかわからなくなったけど……。
シグナムだー！　烈火の将さんと目合った！
……ハッ！？　そ、そうだよ、俺今姿変わってるし、色々と変わってるんだった。
そうだ、冷静、冷静になれ俺！
深呼吸をして息を整え、そーっと……ホントにそーっと見た。
べ、別にビビッては……はいビビッてます、すいません。
……あ、なんかフェイトに向き直った。
それで……笑ってる？　え？　なんでその状況で笑うの？　てか何で笑ったの？
「うお……！　それでいきなり斬りかかったよ。ハハハハまあ、シグナム（バトルマニア）だからわかるけどおぉぉぉー！？」
シュパッ！！
あ、あ……危なっ！
顔のすぐ横をシグナムが放ったとされる斬撃が通り過ぎ建物を壊した。し、死ぬところだった……危うくスパッと逝くところだったあぁぁぁ！？
シュパ！　シュパ！　シュパパパパパパ！！
「死ぬ！！　このままだと死ぬ！！」
なんで的確に俺の周辺に飛んでくるの！？

シグナムいい加減にし――――

ズバンッ！！

「はい、調子に乗りました！！　すんませんでした！」

絶対ワザとだ……！

飛竜一閃並みの威力のものが正確に俺の頭上を越えていくか？　普通……。

というか……なんでこの距離から届くんだろう。

一応、２００メートルぐらいは離れてるんだけど……。

そこで少し一息つき、すぐに同じ方向を見ると――――

無防備状態のなのはに一撃を入れようとしているヴィータが俺の目に映った。

しかも、あれはまずい……直撃コースだ。

アイゼンは……その……かなり痛い、俺実際に喰らっちゃったからなー……。

……ヴィータには悪いけど、止める。

意識を集中させ、掌をその方向に向ける。

「……空間座標認識――固定！」

◆◆◆◆

というわけで――――

「（取り押さえたはいい……アイゼンも止めたままだし、後はなのはをどうするかだあ！？）い、痛い！？　お、おい！　噛むな！」

「うるせー！　どう見てもおかしい奴に捕まってんだ、抵抗するに……決まってんだろうが！！」

ガンッ！

ヴィータの頭部が顎にクリーンヒット……少し目眩がする。
その光景をなのはは呆然として見ている。

「イテテ……（おかしいってハッキリ言うな、ヴィータ）」
「……？　なんであたしの名前知って……むぐっ！？」
「今説明するから……あ、なの……じゃなくて、管理局の人？」
「は、はい！」

突然現れた人物に声を掛けられてびっくりしたのか、若干裏返った声でなのはが返事をする。

「少しタイム貰うから、休んどいて！」
「ふぇ！？」
「むぐーー！？」

なのはは目を丸くして、ヴィータは……てめー！　何言ってんだー！　的な声を荒げて訴えている。

「おら……ちょっと静かにしろ、はやて大好きヴィータ」

そう耳元で呟くと、ピタッと暴れていたヴィータが大人しくなる。
獣か……コイツは。

「おいお前……今、あたしのこと馬鹿にしただろ。……つーか、お前誰だ。邪魔しただけだったら、ただじゃ済まさねえ」

ギロッと睨まれ、アイゼンを首元に当てられる。
危ないからしまって欲しいけど……普通はこの反応であってると思う。
というか……ヴィータはなんでこんなに勘がいいんだろう。

「いや、俺だよ。赤羽零夜だよ」
「……赤羽？」

え？　まさか忘れてるとか……無いよね？
うー、と唸り声を上げ必死に思い出そうとしている。ここだけ見れば普通にかわいいんだけどなー。
そうしていると、ヴィータはハッと顔を上げ俺に向き直る。

「……思い出したぞ、赤羽零夜だな。この前、あたしたちの家に来た」
「そうそう、その赤羽零夜」

なんだちゃんと覚えてたのか。安心した。

「ヘタレの零夜だろ」

安心できなかった。
俺って……。
ずーんと俺が落ち込むと、ヴィータが慌てて訂正する。

「わ、悪かった……冗談だ、冗談。そんなに落ち込むとは思わなくて」
「……大丈夫だ、こんなもん慣れっこだから」
「……慣れたらいけないんじゃないか？　つーか、どんだけ言われ

てんだよ……」

……この世界に来る前から言われてたから、耐性は付いている。嬉しくないけど……。

「んで……改めて何しに来たんだ？」

「何って……手伝いに」

「……建物の裏でシグナムにビビってたのがか？」

ガハッ！！

か、顔が熱い！　焼けるように熱い！

てか……なんでばれてんだ。

「な、なんで知って……」

「やっぱりお前かよ、いや……気づかない方が変だろ。確かに、魔力とか微妙に変わってたから最初は違うと思った……けど」

「けど？」

「……いや、なんでもねえ。気にすんな」

？　なんかひっかかる言い方だ……。

何を言ったのかを訊こうとするとヴィータは「それよりも」と言って話を終わらせた。

「こいつらを片付けねえとな」

ヴィータは、なのはに鋭い視線を向けてそう言った。

――――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第七話　対峙（後書き）

どうだったでしょうか？
ここの女神はそこにいてもいなくても、迷惑を掛けるということですね。

とりあえず、次回は戦闘回になると思います。

では～ノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5676r/

魔法少女リリカルなのは　～最強の転生者？が降り立つ時～

2011年12月20日02時48分発行